

養成校発保育者学習支援システムの開発と活用

神谷 勇毅, 江藤 明美, 小島 佳子
鈴鹿大学短期大学部

Development and Utilization of Learning Support System for Nurseries at Childcare Center Training School

Yuki Kamiya, Akemi Eto, Yoshiko Kojima
Suzuka Junior College

待機児童、保育者不足など保育が抱える問題は数多い。養成校においても、次代保育者である学生を教育し、社会へと輩出する責任を負っている。一方で、保育者を志し、保育者養成校に入学したものの、学習過程において発生する様々な困難な事象から保育者を断念する者、一旦は保育者として就職したが、離職し潜在保育者となる者など、養成校が乗り越えるべき問題・課題も山積している。このような厳しい状況の中、問題を抱えながらも現場で日々奮闘している現職保育者も数多い。本論文は、次・現・潜の立場が違う3保育者それぞれが抱える諸問題に対し、養成校発のICTを活用した保育者学習支援システム開発に取り組んだ内容を報告するものである。

キーワード: 保育者, 養成校, 次・現・潜, 学習支援システム

1. はじめに

ニュース、新聞などでも報道される様に、待機児童問題¹⁾、保育者不足など、現在の保育を取り巻く環境はこれまで以上に厳しい時代を迎えている。

保育者は、保育を支える必要不可欠な人材である。保育者養成校には、限られた期間で専門知識・技能を教育し、社会へと送り出す責任がある。近年は保育者の質向上²⁾が一層求められ、養成校もそれを実現すべく教育を行っている。同時に、保育者養成校として単に学生教育だけに目を向けるのではなく、広く社会に還元をしていく時期にあると考える。

本研究は、ICTを活用し、次代・現職・潜在の立場の違う3保育者を仮想空間で結び付け、知的交流を図るICTを活用した養成校発の保育者学習支援システムの開発とその活用法を探る。

2. 保育者支援システム

2.1 システム運用の狙い

本システム運用の狙いは、立場の違う3保育者に対

し、ICTを活用し「保育」のキーワードの下、仮想空間上で3者間を結びつけ学習支援を行うところに特徴がある。行政なども、現状の保育環境を鑑み、支援に乗り出しているところもあるが、その支援の多くはある特定の立場の保育者に対してのものが多く、立場の違う3保育者を一括して支援をする試みは未だ少ない。養成校が発信する本システムは保育の現状に一石を投じる。

2.2 保育者の抱える問題

システム開発と運用にあたり、運用ターゲットである3者(次代・現職・潜在の3保育者)それぞれが抱える問題を洗い出す。問題を明確に掴み、システム運営をする上で必要になる掲載・発信情報の焦点を絞り、効果的な支援へと繋げる。

2.2.1 次代保育者の抱える問題

次代保育者とは、現在養成校で学び保育者を目指す学生を指す。筆者が勤務する養成校においても、保育者を志し入学したが、学習過程の様々な要因から保育者を断念する者、免許は取得したが保育現場への就職

を断念する者が毎年何名か出る。理由として、

- ① 志す保育者像と現場とのギャップの戸惑い。
- ② 学習した内容が保育現場で必ずしも使えない。
- ③ 資格取得に向け、履修科目が多岐に渡る。

といったものがある。養成校も、学習過程のサポートはもちろん、現場を知る教員を配置し教育にあたるが、日々変わる現場環境の状態を掴み切れない、実習園それぞれの特色・特性を十分に把握出来ていないという問題を抱えている。学生らも、実習前に事前訪問を行うが、ごく短時間であり、そこで園の全てを知り実習に臨むことは不可能である。この問題解決は養成校としても急務である。取得資格に関しても、近年はこども園への移行を迎え、保育士証、幼稚園教諭免許状の2つの資格取得を求められることが多くなってきている。養成校も両方の免許取得を指導するが、2つの資格の同時取得のために履修せねばならない科目が増え、学生によっては負担となる場合もあり、免許取得の過程で取得を断念してしまう者も出る。

2.2.2 現職保育者の抱える問題

現在、保育者として現場で日々奮闘する現職保育者も様々な問題を抱えている。筆者が現職保育者に聞き取り調査を実施したところ、

- ① 自分が学習した内容が現在の時勢に合わなくなっている。
- ② スキルアップ、学び直しをしたいが、その時間を確保することが難しい。
- ③ 現在の養成校で行われている学習がどのようなものかを知りたいが、その機会が無い。
- ④ 一旦就職をすると、他園の保育者との意見交換、交流の機会が少ない。
- ⑤ 現職の立場から、次を担う保育者へ技術や知識を伝授したいが、その機会が限られている。

などが多く挙げられた。保育技術スキルアップ研修などが開催されても仕事に追われ、出向く時間的余裕が少ないという事が共通で見られる。

また、聞き取り調査の中で取り分け多く出た意見として、「次の人(次代保育者)に現職の立場から話をし、次を支えていく保育者として育ててもらいたい思いはあるが、実際に話が出来る機会は、実習に来てもらった時だけである。仕事が忙しいのは事実だが、その機会を作っていかなければ、そういう事を考えねば

ならない時にある。」というものがあつた。昨今指摘される保育に関する問題に対しては、現職保育者も危機感を持つと同時に、現職の立場から次代保育者を育てていかねばという意味も感じられた。

2.2.3 潜在保育者の抱える問題

潜在保育者とは、免許は取得したが、様々な要因で保育者として仕事をしていない者を指す。三重県が行った潜在保育者カムバックセミナーと事後アンケート結果³⁾から

- ① カムバックセミナーは時間的・場所的な問題から継続した出席が難しい。
- ② 保育者として現場復帰の意思はあるが、園のホームページから欲しい情報を得る事が出来ない。十分な情報発信がされていない。
- ③ 長期間現場から離れていたため、自分のスキルが現状に合っているのか、通用するか分からない。などが潜在保育者の抱える問題として報告された。

行政も潜在保育者を掘り起こし、復職を支援し、保育者不足解消へ繋げようという動きがある。しかし、復職を支援するはずのカムバックセミナーでさえ、ターゲットである潜在保育者の希望・要望に沿えていないことが分かった。とりわけ、三重県は南北に長い地形であり、カムバックセミナーの多くが、人口が集中する四日市市や県庁所在地である津市で開催されるため、南部地域の潜在保育者にとっては、復職意欲はあってもカムバックセミナーへの参加が時間的、場所的な問題から難しいようである。

2.3 問題解決への取り組み

前節・項で述べたように、保育者は、次代・現職・潜在の3者共に少なからず解決すべき問題を抱えていることが分かった。そして、その問題は次代・現職・潜在相互に関連するものもある。これらの問題解決を試みることは、保育界の活性へと繋がると共に、保育者全体の質向上への可能性があると考えられる。知的交流・意見交換という面では、出来れば直接顔を合わせての意見交換会などが実現出来ることが理想であると考えられるが、行った調査からその実現は困難を極めることが予想された。そこで、時間的、場所的な制約を超えるため、ICTを活用し、仮想空間で3保育者が知的交流を図ることが出来るシステム構築に取り組んだ。

3. 三重保育パーク

仮想空間で保育者の支援を目指すサイトを「三重保育パーク⁴⁾ (図1参照)」と名付けた。サービスのための URL は日本語、漢字で「http://三重保育.jp」とした。現職保育者への聞き取りの中で、仮想空間上での知的交流に興味を示す一方で、パソコンが苦手なアクセスに不安がある、という意見を非常に多く聞いたため、アクセスを極力容易にするための措置である。サービスの発信にあたり、聞き取り時にパソコンが苦手と答えた現職保育者に対し、複数の URL を提示し、どの URL がアクセスし易いか、と尋ねたところ、概ね 9 割が上記取得 URL 「三重保育.jp」を挙げた。合わせて、次代保育者である学生らにも尋ねたところ、こちらはほぼ 100%問題無くアクセスが出来る状態であった。

情報発信対象範囲については、立ち上げ初期段階であるため、筆者が勤務する鈴鹿大学短期大学部が立地している鈴鹿市にターゲットを絞り、鈴鹿市内の全公私立保育園、幼稚園に限定する。

3.1 三重保育パークの担う発信内容

立ち上げるシステム「三重保育パーク」の担う情報発信の内容は、

- ① 園の教育方針を含む園情報データベース
 - ② 知的交流の場 (意見交換など)
- を中心に考えている。

この 2 つの発信内容は、次代・現職・潜在の 3 保育者が抱える問題で比較的多くのウエイトを占めているものである。養成校発の支援システムに掲載する情報として、比較的早期に準備が可能であり、活用により支援的学習になると期待する。

現在、園情報データベースを先行して構築しており、



図 1 三重保育パークトップページ

鈴鹿市内全域の公立、私立保育園と幼稚園を訪問し、三重保育パークの趣旨説明と情報提供の依頼ならびに今後の計画についての説明を行ったところである。

3.2 次代保育者への支援

次代保育者である学生らへの支援として、園情報データベースは、園の情報を知ることが出来るものである。実習に臨むにあたっては、事前訪問・オリエンテーションを経て実習に入るが、学生の多くから「事前訪問、オリエンテーションは緊張のあまり、何を話されたのか鮮明に覚えていない。」などの声も聴いた。実習は、次代保育者が生きた教材である現場を知り、成長する貴重な機会である。その反面、極度の緊張から日ごろの学習成果を十分に発揮出来ないまま、不完全燃焼で終わるという事例も散見される。学生らも、実習前に園が運営をするホームページを閲覧した上で事前訪問を行っているが、ホームページが十分整備されていないケースもある。情報不足のまま実習へ臨むことは学習機会の損失と考える。

知的交流の場の活用は、現職からのアドバイスを受ける、現場の状況をより身近に知ることが出来るという点と同時に、次代保育者として学んでいる内容を発信することも想定している。養成校内においては、学ぶ立場であるが、三重保育パークでは、教える立場に回ることが期待される。知っている・分かっている知識と人へ教授できる知識とでは、知識の性質が違い、より着実な知識として定着すると共に知識昇華する機会となる⁵⁾。また、発信元が養成校であるため、現在養成校で開講する授業の一部発信も視野に入れる。

3.3 現職保育者への支援

現職保育者の支援として、園情報データベースは、実際に勤務している園の情報を提供してもらう。情報提供を受けるにあたり、情報提供者個人が特定されることが無いよう細心の注意を払い、掲載する情報についても園へ確認を取り、承諾をもらった上での掲載としている。データベースを閲覧することで勤務園以外の園の活動や保育環境整備のヒントなど、現職保育者が気になる情報を発信し、園の活性化へと繋げる。

現職保育者への聞き取り調査の中で、自己保育技術の見直しと、他園で働く保育者との意見交換および次

代保育者である学生への保育技術の伝承とサポートの意欲が非常に高いことが分かった。同時に、過去に資格を取った過程で学習した内容と現在養成校で行われている内容と大きく異なっており、養成校内でどのような教育が行われているかの情報発信についても現職保育者の関心は高かった。

3.4 潜在保育者への支援

資格取得後、様々な要因から現在保育に関わる仕事をしていない潜在保育者の中にも機会があれば再び保育の現場に戻りたいという意思を持つ者が居る³⁾。その反面、復職に至らない要因として、長期間保育と関連の無い仕事をしており、現在の保育環境が掴めないため復職を躊躇うことが挙げられる。また、復職へ向けたサポート体制も未だ十分では無い。園情報データベースで、園それぞれの活動の様子などの情報を掲載することで、園の状況、運営方針などを知る事が出来、復職への足掛かりになる。合わせて、知的交流の場で、現在、養成校で行われている教育を知ると共に、次代・現職保育者に直に意見を求める、潜在保育者同士での意見交換なども可能である。

3.5 三重保育パーク運営の課題

筆者が構築する「三重保育パーク」は、次代・現職・潜在の各保育者に対し、ICTを活用した支援を行うものである。しかしながら、支援の一方で、「仮想空間上で、どれほどの力のある保育者が育つか。」という課題がある。学習支援システムが克服すべき課題を三重保育パークも同様に抱えているのである。学習支援システムという面では、保育者同士での意見交換の場においても、立場の異なる者が集まるため、それぞれの立場の違いから様々な意見が寄せられるという事が期待出来る。「保育」をキーワードに仮想空間上で次代・現職・潜在保育者を結びつけることは価値ある活動であると考えられる。

発信準備を行っている「知的交流の場」については、従来の学習支援システムのような一方通行的なコンテンツ発信では無く、利用者間の双方向学習支援効果を狙っている。そのため、掲載情報についての吟味も欠かせない。知的交流の場の活用として、保育技術向上の交流、保育者ならではの意見交換を期待する。現職

であれば、得た知識を即座に現場そのものへ活用する期待が出来る。また、次代保育者にとっても、得た知識を養成校内の授業、実習時に活用出来る。

4. まとめ

本研究では、養成校発の次代・現職・潜在の各保育者に対し、ICTを活用した学習支援システムを用いた支援を試みている。未だ動き始めて間もないため、十分な効果の検証まで至っていないが、徐々に情報提供など協力してもらえる園も増えてきている。現在は、鈴鹿市内全域の保育園、幼稚園データベースのみの発信に留まっているが、夏を目途に知的交流の場を開設し、学習支援システムの稼働を目指すと共に、仮想空間上でどれほどの力のある保育者支援へと繋がるかの評価を行っていく必要がある。しかしながら、養成校として、人材育成の側面から次代・現職・潜在の3保育者に対して提唱する三重保育パークのような学習支援システムの発信は、新たな保育者養成校の在り方を社会へ示すことになる。さらに研究を推し進め、本格稼働を早期に実現したい。

参 考 文 献

- (1) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課保育所等関連状況取りまとめ(平成27年4月1日)及び「待機自動解消加速化プラン」集計結果(2015)
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000098531.html>
(2017年2月1日確認)
- (2) 柏女霊峰:“保育の質の向上について”,第1回保育士養成課程等検討会,厚生労働省(2009)
- (3) 三重県社会福祉法人三重県社会福祉協議会三重県保育士・保育所支援センター:“保育士就労意向調査結果報告書”,(2014)
- (4) 神谷勇毅:“三重保育パーク設置に向けた展望—ICTを活用した保育士環境支援—”日本教育工学会研究報告集JSET16-1, pp.383-386(2016)
- (5) Yuki Kamiya, Yukuo Isomoto, Satoshi Ito, Shin'ichi Tsumori:“A Case Study of Problem Solving Training Seminar.”, Information Technology Based Higher Education and Training(ITHET2007),pp629-634(2007)